

最終報告書

2015年12月4日提出

国際ロータリー第2710地区
2014/15年度グローバル補助金奨学生
University of Birmingham
MSc Global Cooperation and Security
新口慎太郎

派遣ホストクラブ及びカウンセラー
三原ロータリークラブ
出田啓治様
大目木康行様
大藤宗平様

受入ホストクラブ及びカウンセラー
The Rotary Club of Birmingham Breakfast
Ms. Chris Gregory

10月30日に修士論文の審査の結果が発表され、**with Merit** という成績でバーミンガム大学でのおよそ1年間にわたる修士課程を修了し、無事修士号を取得することが出来ました。12月11日には修了式が学位を授与される予定です。この1年間は当初予想していた以上にあっという間に過ぎてしまいましたが、ロータリーの奨学生として留学し、学外でもたくさんの方と交流する機会を得ることが出来ました。また多くのボランティア活動などに関わることができ、短くも非常に濃密な時間を送ることが出来ました。今までの中間報告と重なる部分も多くありますが、本報告書を最終報告書として2014/15年度グローバル補助金奨学生として活動を報告させていただきます。

学業面での成果

私留学していたのはイギリスのイングランド中部にあるバーミンガムという都市で、バーミンガム大学の大学院修士課程の **Global Cooperation and Security** (国際協力と安全保障) というコースでした。このコースは2年前に世界的な国際関係論の教授であるニコラス・ウィラー氏の指導・立ち上げのもと新設された **Institute for Conflict, Cooperation and Security** (紛争及び安全保障協力研究所) という研究所に特別に設置されたコースで、伝統的な国際関係論だけではなく、心理学や神経学を安全保障や紛争解決に応用するなど、最前線の理論や研究を積極的に行っていました。特に国際政治において「信頼」とは一体何なのかという研究に重点を置いており、信頼醸成はどのように行われるのか、国のリーダー同士の個人の信頼関係が紛争の解決や国家間の関係にどれくらいの影響を持つのかなどを研究しています。私が特に興味を持ったのは国際政治において国のリーダー同士や紛争などに対立勢力のリーダー間での **face-to-face meeting** (差し向かいでの対話) が持つ信頼醸成における影響力でした。実際に歴史を振り返ってみると一触即発の緊張関係にある国家や勢力がリーダー同士の直接の対話を通じて危機を回避している事例が多くあり、またそういったリーダーたちが後に書いた手記などにも、相手の国やイデオロギーは信頼できなくとも対話を通じて相手のリーダーを信頼することができたり、「話ができる相手だ」と思うことができるようになったということなども書かれています。実際の研究の現場では **face-to-face meeting** の影響力について様々な議論があり、クラスの中での議論でも危機を回避できたのは対話を通じて生まれた信頼ではなく、戦争状態に陥るといふ恐怖が最悪の結果を免れることが出来た最大の要因なのではないかという意見も強くありました。大学院の授業ではディスカッションを行うことが多いのですが、決して答えを求めるため



バーミンガム大学

ではなく、お互いの考えを議論させていく中で自分の中での判断や決断の軸を形成していくようなものでした。当初はこのディスカッションになかなか加わることが出来ず、また先生から答えを与えられるわけでもないので非常に苦戦していましたが、理論を学び、そしてそれについて議論する中で問題に対する自分自身の視点や考え方が形成されているのを実感することが出来ました。

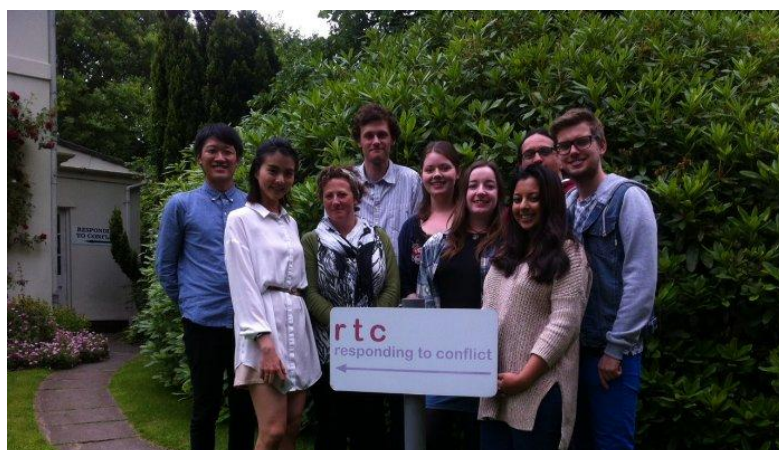
またこのコースは「理論と実践」に非常に重きを置いており、授業の中でも理論について学び議論するだけではなく、実際に自分が政治家や紛争の交渉や仲介を行う立場であれば、それらの理論をどうやって実践するのか、もしくはそもそもそのような理論が実践の場で成り立つのかを考えるためにロールプレイング形式でケーススタディを毎授業で行いました。特に「理論と実践」の重要性を感じたのはすべての授業が終了しイースター休暇に参加した **Trust, Diplomacy and Conflict Transformation** (信頼、外交、紛争転換) という紛争解決の訓練プログラムでした。この訓練プログラムには学内の学生や研究者だけではなく、イギリスの各地の大学からも多くの学生や研究者が参加して行われ、最前線の研究をしている学者や現場で活躍する外交官などを招聘し最新の理論を学びました。そして、それらの理論や現場での経験談・実情を基に模擬国連のような形式で参加者が複数のグループに分かれ紛争の交渉や仲裁の模擬演習を行いました。また後述する紛争解決のスペシャリストの **RTC** から直接紛争解決や交渉におけるコミュニケーションの取り方や準備の方法、紛争要因や解決の糸口の分析の仕方などについて指導を得ることができ、現場で培われた紛争解決における専門的・技術的手法の訓練を受けることが出来ました。プログラム最終日に丸一日かけて行われた模擬での休戦交渉では、一人ひとりがそれぞれ割り振られた役割の立場になり切り、非常に緊張感のある演習となりました。模擬演習を通して訓練プログラムの中で学んだ理論や **RTC** の紛争解決の手法の有効性を確認できたと同時に、紛争の当事者たちの心理・感情は予測しきれないものであり、それら心理・感情が相互理解や和解を妨げると同時に紛争解決における最も重要な鍵であると強く感じました。

大学院での勉強と並行して私は **Responding to Conflict (RTC)** という紛争解決と平和構築に取り組む国際 NGO でインターンシップを行いました。**RTC** でのインターンシップに応募した最大の理由は **RTC** で **Peace and Conflict Advisor** としてコンサルタント業務を行っているジョアン (Joan) さんに惹かれたからです。ジョアンには上記の訓練プログラムの時だけではなく、大学の授業でも数週間指導していただいた



同じコースの友人とウィラー教授

ことがあり、ジョアンさんの紛争解決にかける熱い思いやそのお人柄に惹かれ、このような方がいる組織で働く経験をしたと思うようになりました。ジョアンさんはご高齢にも関わらず現在もひと月に何度も海外の現場で紛争解決の仕事をされています。私はリサー



インターン先の RTC で

チ・アシスタントというポジションで影響評価のプロジェクトに携わりました。このプロジェクトでは過去に RTC が行ったプロジェクト等に関わった人々にインタビューを行い、RTC が紛争解決や平和構築にどの程度の、またどのような影響力を持っているかを評価しました。調査の対象となった過去のプロジェクトの多くはジョアンさんが手がけたもので、様々な人へのインタビューを通して多くの人がジョアンさんのコンサルタントの専門性や有効性を高く評価していましたが、それ以上にジョアンさんの人間性に魅了されている人が多くいることを話を聞いていく中で分かりました。紛争解決においては言語能力、分析力、専門性や知識などが重要ですが、相手の心を掴むことも非常に大切であるということを感じさせられ、大学院で学んだ紛争解決における「信頼」の重要性に通じる部分がありました。

修士論文では「分断された社会における移行期の正義と平和構築：ミャンマーに対するカンボジアの教訓」というタイトルで研究を行い、民主化や武装した少数民族との和平交渉が進んでいくなかで、軍事政権を中心に行われた過去の人権侵害をどのように扱い、また後世に伝えていくべきかということについて書きました。現在のミャンマーは段階的にはありますが民主化への道をたどっており、それに対して日本をはじめとする多くの国が援助増大させ企業の進出も非常に目立つようになりました。またアメリカなども経済制裁を緩和するなどミャンマーの民主化への姿勢は国際社会において歓迎されています。しかし実際には軍部のプレゼンスは依然として高く、真の民主化には程遠いとも言える状況です。さらに第 2 次大戦後にイギリスから独立して以来続いている少数民族との対立や紛争の問題は、経済の優先と軍部を中心とした体制の維持のため、その解決のための十分な努力は国内的にも国際的にもなされていません。「移行期の正義」とは独裁政権や軍事政権から民主的な政治体制に移行する期間において、非民主的政権によって行われた暴力や差別などの人権侵害をどのように裁き、またどのようにそのような負の歴史を教訓として残していくかについて議論されている分野です。この考えは非民主的政権から民主的政治体制への移行期においてははじめは議論されていましたが、現在では民族対立や国内紛争など

を抱えていた社会が平和で安定した社会へと転換する際の移行期においても広く議論されるようになりました。現在のミャンマーはまさに移行期であり、真の民主化が達成されてからではなく移行期である今でこそ移行期の正義について考え、民主化のプロセスや少数民族との停戦プロセス中で未来を見据えた議論を進めていく必要があります。しかし、現在のミャンマーでは経済成長と民主化を優先する中で今後過去の人権侵害についてどのように取り扱っていくべきかという議論が十分にはなされていません。例え現在の停戦協議によってミャンマー全土での紛争が終結したとしても、長年の対立の中で生まれた憎しみや家族や友人を失った人々の悲しみは消えるわけではなく、平和で安定した社会は達成されず、紛争の再発の可能性もあります。移行期の正義の議論や国際社会による試みは古くよりなされ、特に第 2 次世界大戦後の東京裁判やニュルンベルグ裁判、冷戦後多発した民族紛争のための裁判や真実和解委員会、国際司法裁判所 (ICC) の設立などを通じて発展してきましたが、依然として現場では課題が多く残っており、試行錯誤が繰り返されています。カンボジアをミャンマーの対する先行研究として選んだ理由は、カンボジア内戦後に設立されたカンボジア特別法廷 (ECCC) が紛争中の行われた人権侵害を裁く法廷として、新しいモデルであったことが理由の一つにあります。またミャンマーは先日行われた選挙でアウンサン・スー・チー氏が率いる野党の NLD が大勝しましたが、今後もしばらくは軍部の政治への関与や影響力は強く続いていくと考えられ、カンボジアの独立した機関であるべき ECCC に対するカンボジア政府の関与の強さや真実の解明に対する政府の非積極的姿勢などはミャンマーの今後の移行期の正義を考えるうえで非常に参考になると事例として研究しました。カンボジアへは以前紛争解決実習と称し、学部生のときのゼミの担当教官とフィールドリサーチをしたこともあり、その時に調査した内容やインタビューを通じて得たそれぞれの人が持つ個人的な感情やストーリーなどは研究を進めていくうえで非常に有効でした。しかし一方でミャンマーには実際にフィールドリサーチには行けなかったことで、ミャンマーに関する生の情報や一次資料というのは限られてしまいました。修士論文の研究の結果を簡潔にまとめると、紛争後の社会では教育の機会が限られ初等教育ですら受けられない子どもたちが圧倒的に多く、また大人たちも貧困にあえぎ自分たち家族がその日食べる分だけを稼ぐのに毎日必死になって暮らしています。過去の人権侵害や紛争にさまざまな思いはあれど、日々の暮らしで手いっぱいな彼らにとっては自身の問題、また自国の問題として考える余裕はありません。カンボジアではアメリカのイェール大学行っていた活動・研究を引き継いだ独立した団体が歴史資料館を作り、内戦時の事実の調査・保存を行っています。しかし、そういった資料館や博物館を訪れるほとんどの人は海外からの観光客であり、カンボジアの多くの人は訪問どころかそのような施設の存在すら知りません。またその団体は歴史の教科書に内戦時のことについて詳しく記載し、若い世代にその事実を教訓として伝承する活動も行っていますが、そもそもの就学率が低いうえに義務教育であっても教科書は教員も児童・学生も購入しなければならず、農村部を中心とした学校で使われている教科書の多くは長年使い続けたものや姉・兄からのおさがりで

す。移行期の正義のモデル形成の議論はしばしば国際社会の関与の度合いと現地政府のオーナーシップの度合いのバランスや予算など制度面での議論に終始しがちです。また制度の整備が十分に行え、真実の解明等を行えたとしても市民の多くはそれらの情報にアクセスすることが出来ません。過去の人権侵害を適切に処理し、紛争後や民主的政権に移行後の社会に平和と安定をもたらすという移行期の正義の目的を考えると、制度面での議論や整備だけでなくそれらの恩恵を市民が得られるように教育の充実や貧困の削減などの開発分野にも目を向け、積極的に環境を改善していく必要があります、またそれら開発に関する議論を移行期の正義の枠組み内で考えていかなければなりません。修士論文の研究を通して1年間学んだことをもう1度自分で咀嚼しながら考え、自身の考えを論理的にまとめることができたのは非常に良かったと思います。また修士論文の指導教官になってくださったヤキンソー教授は非常に丁寧に指導して下さり、オフィス・アワーなどを通じて何度もアドバイスをくださいました。ただ同時に1年間という短い修士課程の中のわずかな時間を使って論文を仕上げることの難しさも痛感しました。実際に提出する際にも自分で納得できていなかったり、更に調べて修正を加えたい箇所もあったままの提出となりました。しかし、修士論文を執筆する過程で得たリサーチの方法や論理的な文の展開の仕方などは今後国際機関やNGOなどでキャリアの積んでいく上で必要になり、また生かしていけるのではないかと思います。

参加したロータリー活動、プロジェクト内容

イギリスに渡って1ヵ月程経った9月26日～28日に **Rotary Scholars Link Weekend** というイギリスとアイルランドに2014/15年度に新たに奨学生として留学してきた学生のためのイベントがありました。このイベントは毎年イギリスとアイルランドのロータリー(RIBI)の各地区が持ち回りで開いており、2014/15年度はウェールズのカーディフという都市で開かれました。全奨学生ではありませんでしたが、イギリス及びアイルランドで学んでいる奨学生達が3日間、オリエンテーションや講演、レクリエーション、観光などを通して交流を深めました。私はこのイベントがイギリスに来て初めてのロータリーであったため他の奨学生と情報交換をすることができ、またイギリスのロータリークラブの例会でのプレゼンテーションをどのように行っているか、ロータリアンの方々とのように関わっているのかを聞くことができ、1年間ロータリーの奨学生として学問だけではなくロータリー活動に参加していくうえで非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。

11月7日～9日には受入地区である第1060地区の地区大会に出席しました。私自身は地区大会でプレゼンテーションなどの役割はなかったのですが、この地区大会ではその後のイギリスでの生活で大変お世話になるロータリアンの方々に出会うことが出来ました。またこの地区大会では同じ第1060地区に地区補助金奨学生として他の大学に留学されている日本人の方ともお会いすることが出来ました。会場では慣れない場で緊張していた私たち奨学生に多くのロータリアンの方が優しく話しかけて下さり、連絡先の交換やホームパ

ーティーなどへの招待もしてくださりました。プログラムの講演も非常に興味深いもので、特にロータリーが取り組んでいる「安全な水」のためのプロジェクトで、アフリカで実施されている「砂のダム」についてのお話は今でも強く印象に残っています。イギリスでは第一次世界大戦の終戦記念日である 11 月 11 日に最も近い日曜日に、同大戦以降の全ての戦没者に対する追悼式が行われ、イギリス全土で 11 時に黙祷が奉げられます。地区大会最終日の 11 月 9 日はこの日にあたり、私もロータリアンの方々と共に黙とうをささげました。日本では毎年幼いころから 8 月 6 日に黙祷を行っていましたが、この地区大会での黙祷をひとつのきっかけに、戦争がもたらすもの、特に戦争に伴う死者に対する考え方が少し変わりました。それまでは無意識ではありましたが、8 月 6 日に黙祷を行う際、私は「敗戦国」の者として、また「ヒロシマ」に生まれた者として祈りを奉げていたように思えます。しかし、11 月 9 日にイギリスで、また第 2 次世界大戦では日本を敵国として戦争を経験された方達と共に、全ての戦没者に対して祈ることで、当たり前のことではありますが、戦争では敵味方関係なく数えきれない死者を出し、その死を長年悲しみ悼まなければならない家族や友人がいるということを感じさせられました。うまく言葉で表すことが出来ませんが、過去の戦争だけではなく現在起こっている戦争や紛争でも、自分の知らないところでたくさんの人が命を落としており、私たちは過去の戦争における立場に関係なく未来のための教訓として学び、そして実行すべきことがあると強く感じるようになりました。

イギリスに渡って約半年ほどの間は受入先でのホスト・カウンセラーとホスト・クラブが無いまま奨学生としての生活を送っていましたが、2 月に以前からお世話になっていたクリス (Chris) さんがホスト・カウンセラーを、またクリスさんが所属するバーミンガム・ブレイクファスト RC (Rotary Club of Birmingham Breakfast) がホスト・クラブを引き受けてくださることになりました。クリスさんには渡英直後からバーミンガム市内を案内していただいたり、後述するローターアクトクラブを紹介していただくなど、大変お世話になっていましたが、私がホスト・カウンセラーがいないため地元のロータリーと関わる機会がなかなか作れないと相談したところ、快くカウンセラーになってくださりました。2 月 13 日には例会に招待していただき、自己紹介やバナー交換、また三原 RC よりお預かりしていたお土産をお渡しすることが出来ました。

2 月 17 日には 11 月の地区大会でお会いしたピーター (Peter) さんがご自身が所属されている



バーミンガム・ブレイクファスト RC 会長のアンジェロさん(左)
とカウンセラーのクリスさん(右)

レディッチ・キングフィッシャーRC (Rotary Club of Redditch Kingfisher) でのディナーを兼ねた例会に招待してくださいました。例会はバレンタイン直後ということもあって多くのロータリアンの方がご夫妻でディナーに来られていました。レディッチ・キングフィッシャーRCの方とは地区大会の際に同じテーブルで食事をする機会が多く、久しぶりにお会いし近況報告をさせていただくこともできました。ディナーの後にはプレゼンテーションをさせていただきました。私は広島を紹介と大学院での研究内容について発表をしました。原爆投下直後の広島の写真と現在の街並みの写真を比較しながら、この70年でいかに広島と広島の人たちが街の復興と平和のために力を尽くされたかを話した際には、多くの方が現在の広島の美しさに驚きの声をあげられていました。例会終了後にはたくさんの方が私のもとにお話をしに来て温かい声をかけてくださったり、プレゼンテーションの感想を聞かせてくださいました。

8月6日にはコベントリーという街で毎年行われている「ヒロシマ・デイ」と称される、広島と長崎での原爆死没者の冥福を祈る式典に出席しました。11月の地区大会でジョン (John) さんというロータリアンにお会いした際にこのヒロシマ・デイのことについて伺っていた私はジョンさんに連絡を取り、式典の詳細を知りたいと相談したところ、私が広島出身ということもありジョンさんが特別なゲストとして私を招待してくださいました。この式典自体はロータリーが主催しているものではありませんが、ジョンさんは終戦に朝鮮戦争に参加していた国連軍の軍人として呉市に駐留したこともあり、また現在も広島にたくさんの友人がいらっしゃるなど、広島との縁からヒロシマ・デイに長年携わっておられ、多くのロータリアンのかたも式典の準備などに関わっていらっしゃいました。このコベントリーという街が毎年8月6日にヒロシマ・デイを開くには第2次世界大戦中にコベントリーが経験したナチス・ドイツによる大規模な空襲が背景にあります。広島からコベントリーに来られジョンさんと知り合われた方が広島でコベントリー会というのと設立されており、逆に広島でも毎年11月にコベントリー・デイと称し、コベントリーで空襲で亡くなられた方の冥福と平和を祈念されています。賀茂北高校とコベントリーの学校はこのコベントリー会とジョンさんを通じて姉妹校の提携を結び高校の交換留学を行うなど、草の根交流もされています。コベントリーでのヒロシマ・デイには国籍、人種、宗教を問わずたくさんの方が一緒に黙祷を奉げられ、広島の間人として非常に



コベントリーでのヒロシマ・デイにて

うれしく思うと同時に、このようにお互いの違いを超えて多くの人が平和への思いを一つにすることが今紛争が起こっている地域でもできれば、どれだけたくさんの人たちの命が救われ、日常を破壊されずに済むのだらうとも思いました。



地元のカーニバルでカウンセラーのクリスさんと
ローターアクトクラブのメンバーと出店

私はバーミンガム・ローターアクトクラブ (The Rotaract Club of Birmingham UK) のロ

ーターアクターとしても留学先でロータリーの活動に携わりました。私たちのクラブでは1年間小児がんに苦しむ子どもとその家族を支援する団体と家族を失い精神的に苦しんでいる子どもを支援する団体を重点的にサポートし、ローターアクトの活動を通して得たお金を寄付したり、それらの団体に対する一般の方からの支援の輪を広げるために認知度を上げるための活動などをしていました。私は単発的なボランティアの経験はありましたが、特定の団体のために長期に渡って支援活動をしたことが以前はありませんでした。そのためローターアクトクラブでの活動は非常に学ぶことが多かったです。支援を行っているという事実に満足するのではなく、いかに効率的に寄付を集めることができるのかをビジネスのマーケティングのように考えなければなりません。私たちのクラブでは街頭に立って募金を呼びかけるのではなく、地元の商店から寄付もしくは安価で売っていただいた商品を地元のお祭りやコンサート、その他のイベント等で販売したり、日本のお祭りの屋台にもあるようなくじを引いて番号が出ればその商品がもらえる店 (英語では **Tombola Stall**) を出店したりし、得た利益を支援している団体に寄付をしました。クラブのメンバーと共に試行錯誤しながら行った活動は本当に有意義なもので、ボランティアや社会奉仕活動を通して誰かに何かを与えるよりも、自分自身が得るものの方が多いと感じました。これらの活動を通して国際ロータリーの標語でもある「超我の奉仕」の喜びが何であるのかをわずかではありますが学べたように思えます。

直面した課題、問題点等

学問において直面した課題は英語力でした。私は学校の求める英語力の基準をクリアしており、また大学院の授業が始まる1ヵ月前に渡英して4週間の英語のコースを受講していました。4週間の英語コースでは英語を母国語としない他の留学生とともに論文の書き方やプレゼンテーションの行い方、またディスカッションの練習をしていました。英語のコースでは特に自身の英語力に限界を感じることもなく担当の先生からも自信をもって大学

院の授業に臨めと言っていました。しかし、いざ大学院の授業が始まると環境は大きく変わりました。クラスメイトのほとんどは英語を母国語とするネイティブ・スピーカーや、アジア出身でも幼少期より英語で学校教育を受けてきた人ばかりでした。また、教授が学生に対して一方的に授業を行うスタイルが一般的な日本の大学教育と違い、私のコースではほとんどの授業で教授と学生が1つの輪になって議論をするスタイルをとっていました。課された論文を読んで授業に臨んでもクラスメイトや教授が言っていることを聞き取り、メモを取ることで一杯いっぱいになってしまい、授業内で全く発言をできずに1日を終えてしまうということも初めのうちは多くありました。そのような時期には授業の度に自信を無くし、自分を情けなく思っていました。しかし生の英語に慣れるために教室外でも積極的に友人との時間を持つようにし、また日本語を学んでいるネイティブ・スピーカーとお互いに語学を教えあうランゲージ・エクスチェンジをはじめ、次第に授業の中でも少し余裕を感じるようになり発言回数も増えていきました。

ロータリーの奨学生として直面した課題は2点あり、1点目は私がロータリーの奨学生として少し気負い過ぎていたことで、2点目は受け身な形でロータリーの活動に関わろうとしていたことです。私は当初ホスト・クラブとホスト・カウンセラーが設けられておらず、また第1060地区の奨学生の担当者から連絡がなかなか返ってこず、ロータリーの活動に全く関わってない時期がありました。9月にカーディフで他の都市に留学している奨学生と交流した際、多くの奨学生が既に複数回例会でプレゼンテーションを行っていたり、カウンセラーの方を通じて頻繁にロータリアンの方々と交流をされていました。私は渡英して半年経っても一度も例会に出席できておらず、奨学生としての義務を果たせていないのではないのかと焦りを感じていました。そのことを巡って第1060地区の奨学生の担当の方とミスコミュニケーションが生まれてしまったこともありました。要因としてはクラブやロータリアンとの窓口になってくださるカウンセラーがいなかったことや地区の奨学生の担当の方から連絡を返していただけないということもありましたが、私自身にも原因はありました。留学前に日本で渡英の準備をしている際にはロータリアンの方や事務局の方が例会、ICUの平和フェローとの交流会、壮行会などの手はずを整えてくださり、私は呼んでいただいた場に出席するだけでした。私はイギリスでも例会や社会奉仕活動にもあちらから招いていただけるのだろうという「お客様」のような気分になってしまっていました。そのためロータリーの奨学生としてロータリー活動に関わらなければならないと思う反面、1060地区や地元のクラブの方から誘っていただけるだろうと受け身の状態になっていました。ローターアクトの活動を通して積極的にロータリーと関わっていけるようになったことをきっかけに、次第に自らロータリアンの方に連絡を取ってみたり例会に出席させていただくことが出来るようになり、また困ったことがあれば遠慮なくロータリアンの方に相談できるようになりましたが、留學生活のより早い段階からそのようにできていれば、更に多くの活動に参加でき、またよりたくさんのロータリアンとも出会えることができたのではと後悔が残っています。

今後の課題、キャリア目標

今後の課題はいかに紛争解決・平和構築の分野でキャリアを築いていくかということです。大学院での研究、そしてRTCでのインターンシップを通じて私はそれまで以上に紛争解決・平和構築の分野で自分のキャリアを積んでいきたいと思うようになりました。しかし、この分野では多くのポストが最低2～3年の職業経験を必須の条件としており、社会人経験の私が応募してボランティアや無給のインターンとしてではなく仕事として紛争解決・平和構築のフィールドで働くことは非常に難しいです。現在は在外公館専門調査員や青年海外協力隊などに応募しており、これらのポストで2年の経験を積んでその後国連ボランティアに応募できればと考えています。また、これらのポストを得られなかった場合は12月に東京で行われる留学経験者のためのキャリアフォーラムに参加し一般企業の内定をつかみ、企業で社会人としての経験を積んでから改めて国連ボランティアやJPOなどに応募したいと考えています。

今後のロータリー活動への参加

今後のロータリー活動へは学友として積極的に奨学生のサポートを行っていきたいと思っています。イギリス滞在中にも2015/16年度の奨学生の方にメールやインターネット電話を通じて奨学金の制度やイギリスでの生活についての相談に乗らせていただく機会が何度かありました。私自身、この度のイギリスへの留学が初めての留学で、奨学金の制度だけではなくビザのことや生活のことでわからないことが多くありました。今後も学友として留学中の奨学生や留学に向けて準備している奨学生に対して私の経験を基にアドバイスをし、不安などを軽減しより充実した留学生活が送れるようお手伝いできればと思います。学友として活動はまだ具体的に分かっていない部分もあり、学友会の先輩方のご指導のもと学友会を、そしてロータリーを盛り上げていければと考えています。

今後の奨学生への助言

大学院で母国語以外の言語で学ぶということは非常に大変で忙しい毎日を過ごすことになると思いますが、積極的に教室・図書館外での時間を、特に友人との時間を確保して欲しいと思います。新しい環境にまだ慣れておらず、勉強の時間を確保するために友人達からの誘いなどを断ってしまいがちな留学生活の序盤でこそ、机から離れて多くの人とコミュニケーションをとって欲しいです。大学院には現地の学生だけではなく様々な国から異なるバックグラウンドを持つ学生が学びに来ています。そのような環境で学ぶだけでなく教室の外でも時間を共有することで異なる意見や考え方、価値観などに接する機会が増えると思います。また情報の共有などを積極的に行うことで、友人同士、お互いの情報不足を補完できると思います。忙しい大学院生活の中では情報も網羅しきることは非常に難しいです。課題に関する情報は分かりやすく比較的公に学生に伝えられることが多いですが、インターンシップや学内での公募される特別なプログラム、講演などの情報は常にアンテ

ナを張り、毎日のように大学のポータルサイトをチェックしていなければいけません。実際に私は比較的まめにそのような情報も確認するようになっていましたが、友人たちと Facebook のグループ等を作成して常に情報を共有しアップデートし合うことで、自分が見落とした情報に気づかされることも多かったです。また友人との時間を定期的に持つことで生活にもメリハリがつくと思います。大学院では常に何かしらのタスクを抱え、やるべきことに追われ続ける生活になってしまいます。そのため生活にメリハリがつきにくくなり、勉強や作業の効率も鈍ってしまうこともあります。友人との時間や自分にとって良い息抜きができる時間を積極的に持つことでオン・オフを切り替え、生活にメリハリを持たせることが出来ると思います。

ロータリーの活動に関しては決して受け身にならず、積極的にロータリアンの方々に連絡を取り、また社会奉仕活動にも参加して欲しいと思います。海外では一つの街に複数のローターアクトクラブがあるなど、非常にローターアクトクラブの活動が盛んです。ローターアクトクラブに入ることも有意義な留学生活を送るうえで一つの選択肢になりうると思います。ロータリーの活動に参加することで、私は普通の留学生では経験できないようなことを多く経験できたように思います。また、ロータリーの活動を通してたくさんのかげがえのない出会いもありました。これからロータリーの奨学生として留学される方にもそのような経験をさせていただきたいと思います。

謝辞

私は 1 年間ロータリーの奨学生として留学し、非常に充実した生活を送ることが出来ました。資金面での支援は言うまでもなく大きく、学業に専念することが出来る環境を整えていただきました。しかしそれ以上に、ロータリーがもたらしてくれたたくさんの方との出会いが、私にとってはかけがえのないものになっています。一つひとつの出会いがとても印象的で、またそれらの出会いを通して経験したことは、普通の留学生にはなかなか経験することが出来ないことだったと思います。また 1 年間の留学、そしてその準備段階からたくさんの方が私の留学をサポートしてくださりました。様々の不安もある中、そのようなサポートがあったことは本当に心強く思えました。留学を開始する以前から準備や手続きをしてくださった財団委員の皆さま、地区事務局また三原 RC の事務局の皆さま、カウンセラーを務めてくださった皆さま、そしてすべてのロータリアンの皆さまに感謝申しあげます。今後はこの 1 年間に得たこと、学んだことを土台に紛争解決や平和構築の分野で活躍できるようより一層励んでいきたいと思います。またその様子をロータリーの皆さまにも温かく見守っていただければ幸いです。